様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（B）一般
研究期間：2006　～　2009
課題番号：18300212
研究課題名（和文）　伝統スポーツにおける身体技法研究の方法論の確立

研究課題名（英文）　Establishment of methodology concerning body technique research in traditional sports

研究代表者　石井　隆憲（ISHII TAKANORI）
東洋大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：70184463

研究成果の概要（和文）：
本研究は、伝統スポーツを対象にして、そこで展開される身体技法を研究するための方法論を作り上げることが目的である。研究の結果、伝統スポーツの身体技法は、「身体と内なる世界」と「身体と外なる世界」の両面からのアプローチが必要であり、また、異なる研究視点と方法を同時並行的に行うことが、すべての研究を補完しあうことになり、より充実した身体技法研究につながるという結論を得た。

研究成果の概要（英文）：
The present study has aimed to make up the method of researching the technique of body in traditional sports. As a result of the research, it is necessary to research the technique of body of traditional sports from both sides of "World in the body" and "World outside of body". And, we conclude that it is effective to do those researches at the same time.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 18 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
平成 19 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
平成 20 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
平成 21 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
総　計	9,500,000	2,850,000	12,350,000

研究分野：健康・スポーツ科学
科研費の分科・細目：スポーツ科学
キーワード：伝統スポーツ、身体技法、伝承、身体感覚、実践

１．研究開始当初の背景

スポーツを対象とした文化人類学的な研究領域において、スポーツの身体技法の伝承に関わる問題は中心的な研究課題の一つとして、今後の研究促進が待たれている領域である。それは次のような理由からである。すなわち、スポーツをおこなう集団は、その集団内でお互いに理解しうるような経験、関心、

あるいはシンボルなどが存在しており、独自の社会的世界を形成している。このような世界の中で伝承される動きは、単にスポーツ技術だけにとどまらず、当該スポーツに対する理解や認識のあり方にも多大な影響を与えてきた。そしてスポーツの文化人類学的研究では、こうした伝承可能な動きの総体を「身体技法」と見なしてきた。したがって、身体技法の伝承を研究していくことは、スポーツという極めて文化的な活動が継承されていく過程を明らかにすることであり、これがスポーツ人類学のみならず、今後のスポーツ科学にとっても多大な貢献をもたらすと考えてきたわけである。

このような状況を受けつつ、最近のスポーツ人類学では、スポーツの身体技法を捉えるためにモーションキャプチャーの手法を用いながら、動きを捉えたり、動きの習得過程を記録するという試みがなされている。ところが、こうした研究方法は、身体の動きを記録するという点においては優れていても、指導者と学習者の相互行為が身体技法の習得に大きな影響を及ぼしていることや、時間経過とともに学習者の身体感覚や世界観が徐々に変化する過程を明らかにすることはできない。これまでスポーツの文化人類学的研究領域が対象としてきた「伝統スポーツ」や「民族スポーツ」は、「伝統」や「民族」という冠が象徴するように、独自の文化的環境の下にスポーツ技術に対しても固有の文化的な意味を付与させ、これを身体技法として伝承してきたわけで、ここには近代スポーツの伝承とは明らかに異なる文化に根ざした技法の伝達が存在しているからである。つまり、現在提案されているスポーツ人類学における身体技法の研究方法では、社会や文化を背景とする伝承のあり方やスポーツの社会的世界に身をおくことで形成されていく独特な認識の世界についての研究を進めることができず、文化の問題として、また人間の認識の問題として身体技法に向かい合うことができないという限界があった。

２．研究の目的

そこで本研究では、これまで述べてきたような問題点を克服すべく、伝統的スポーツの伝承について①固有の身体技法を維持してきた実践共同体の秩序の中で技法伝承のために、どのような方法と手順が取られてきたのか。②また、この共同体内部の価値意識が新参者である他者にどのような身体的認識の変化をもたらすのか、という問題意識を持ちつつ、伝統スポーツにおける身体技法を研究するための方法論の構築を目的としている。

３．研究の方法

上記の目的を果たすために、次のような手順を取ることとした。

最初に身体技法に関わる研究史を整理し、それをスポーツ場面の研究に応用していくための暫定的な方法を練り上げる。次に、この方法に基づいて、調査対象としたミャンマーの「チンロン」、韓国の「気功」、ドイツの「ツゥルネン」の身体技法を個別事例としながら調査を実施し、その中で方法論の修正を行う。最終的には、個別事例の調査で使われた修正版の方法論を比較検討しながら、伝統スポーツにおける身体技法の調査方法と記述についての一般的方法論を構築する。具体的には、研究史の検討において、指導者と学習者の関係やスポーツを実践する人々が作り上げる共同体の作用を読み解くために「シンボリック相互作用論」や「正統的周辺参加論」あるいは「ハビトゥス論」などを取り上げ、また個々人の中で引き起こされる現象については「自我論」や「発生運動学」、ある

いは「身体化された心」などの理論に注目する。こうした研究史の検討を通してフィールドワークに生かしていくための方法を探求する。

４．研究成果

身体技法研究の方法論の確立を目指すために、最初に以下にあげる５つの方向性の検討からはじめた。

①認知科学的な理論を背景としながら、行為によって生成される認識を自分自身が体験することで、その経験を現象学的な立場から記述するという試み。

②伝統スポーツにおける伝承者の身体経験を言語化していくことを通して、伝承者のライフヒストリーを明らかにしていくという試み。

③身体技法の指導者と学習者との間でおこる相互行為に注目し、これによって形成されていく学習者の認識の世界の記述を目指すという試み。

④伝統スポーツの担い手たちによるコミュニティが作りだしている慣習的な規範であるとか、何らかの権力構造を明確にしておくという試み。

⑤通時的な観点に立って、身体技法に対する社会的な嗜好性の移り変わりに注目するという試み。

以上のような 5 つのアプローチは、これまでの先行研究に基づくことで導き出されたものである。研究対象の中で「チンロン」と「気功」については、①から⑤までのアプローチをおこない、「トゥルネン」については④と⑤のアプローチを試みた。また、こうしたアプローチの有効性を検証するためにベトナムに伝播した「空手」と韓国に伝播した「太極拳」についても④と⑤のアプローチを中心に、可能な範囲で①から③までの方法を試みた。そして、それぞれの研究対象の結果を基にしながら、研究代表者ならびに研究分担者が、それぞれに専門としている調査対象地域意外での調査経験を加味しながら、ディスカッションを続けた結果、以下のような手順と方法が身体技法研究をより有効なものに出来るとの結論を得た。

（１）身体技法調査の前提

身体技法の研究にあたって、まず、調査者のポジションは極めて重要となる。調査者はあくまでも観察者としての立場を取るのか、それとも調査者自身が対象とする伝統スポーツの担い手となるようなトレーニングをするのかで身体技法研究は大きく違いを見せることになる。身体感覚や学習者の認識の変化、さらに現象学的な立場からの記述については、後者の方法をとらなければならず、前者の方法では不十分であり、さらに解釈といった面においても大きな違いのでる可能性が明らかとなった。

このことから、対象となる伝統スポーツの種目にもよるが、可能であるなら調査者自身がその伝統スポーツを学ぶことが効果的である。ただし、次のような問題点も明かとなった。伝統スポーツを自らが学ぶということは、それなりに時間のかかる作業であり、どれくらいの時間をかけると身体技法研究に有益なのかについては、後述するように「身体と内なる世界」に焦点をあてるのか、それとも「身体と外なる世界」に注目するのかで、伝統スポーツを学ぶ時間は異なる。前者の場合、短くとも４～５年が必要であり、可能であれば 10 年以上の時間をかける必要性が指摘された。これに対して後者の場合には、そこまで時間をかけなくても、ある程度の研究成果は見込まれるという結論に達した。以下に、検討された方法について整理する。

（２）予備的知識の学習

身体技法研究を進めて行くに際して、基礎

的知識として、対象となる伝統スポーツを包含する社会の歴史を把握する必要がある。伝統スポーツの在り方は、社会の存在によって規定されるので、その社会の動きをある程度知っておくことが必要となる。さらに、こうした社会が生み出した文化についても、同時に学習する。このような予備的知識を持った後に、身体技法の研究にはいると効果的である。

身体技法の研究は、次に述べるような身体を中心にして、その内部との関係を中心に見る「身体と内なる世界」の視点と、それとは反対の見方となる「身体と外なる世界」に焦点をあてた二つの見方が存在しており、それぞれにアプローチの方法が異なる。次にこの二通りの研究方法について述べることにする。

（3）身体と内なる世界

我々が考えたアプローチでも示したように、伝統スポーツはその担い手たちが作り上げている独自の認識の世界が存在している。こうした認識の世界を把握するためには、調査者（学習者）が指導者に対して積極的に質問を投げかける必要がある。しかし、最も重要なことは、動き（身体技法）と連動して生み出される認識の世界を明らかにしていくことなので、学習者はその動きの習得を先行させなければならない。

次に、身体技法の調査において、特に注意が必要なのは、学習者が動きを獲得するまでに、いったい何が起っているのか、自分自身の内観を克明に記録するということである。動きが一度身に付いてしまうと、すでにそれよりも以前の感覚は忘れ去られてしまい、もう二度と同じ感覚に戻ることが出来なくなってしまうからである。したがって、身体技法を学習しはじめた当初から、詳細な内観の変化を綴っていくという作業は欠かすことができない。

また、こうした作業と同時に指導者と学習者の会話そのものも記録することを心がける必要がある。身体技法研究をわかりにくくしている点の一つとして、こうした指導者と学習者の相互行為が、少なくとも学習者の認識の世界を常に変化させていることが上げられる。そのため相互行為と内観の変化を連動させることが重要になる。

また、このような記録の対象とは別に、指導者が身体技法を状況によってどのように選択するのか、その思考過程を明らかにすることも必要である。実際の所、この思考過程は伝統スポーツに対する習熟度と深い関係があるため、学習者の理解を超えるものであることから、指導者に対するインタビューを中心にしながら思考のプロセスを探ることになる。ただし、10 年以上の時間をかけて調査を続けることで、こうした思考のプロセスは学習者自身の中にも形成され、十分な説明が出来るようになると考えられる。

次に身体技法と身体感覚に関して、その言語化についての結論を述べる。身体技法の言語化については、調査者自身が外面的に見える動きを客観化してそれを言語化することが最も重要なことである。しかしながら、伝統スポーツのコミュニティ内で使われている独特の表現といったものも存在しており、こうした表現については、それを十分に利用することが必要である。ただし、その独特の表現は、単に身体の動きだけを言い表すことだけにとどまらず、その時の感覚や状態なども含んだものとなっていることが多い。いわゆる技言語と呼ばれる用語である。身体技法や身体感覚を言語化するということは、基本的にこの世界がわからない人々に言葉を使って説明するということであるので、技言語を使うことは、それなりに意味のあることではあるが、必ず、その言葉のフレームを示すことが

必要である。

身体感覚については、上述した内容の他に、いわゆる「私の身体を通して得た感覚」というものがあるはずである。この感覚が時には技言語とつながっていることもあるが、必ずしも、そうしたことばかりではないので、詳細にその感じる感覚をありのままに記録することが必要である。また、こうした、記録とは別に、この記録を分析するための記述も必要になる。つまり、自分が感じた感覚を下敷きとして、それをなるべく客観的に表現するような加工をするわけである。こうした作業を通して伝えることのほとんど出来ない身体感覚を言葉に置き換えることが出来る。また、必ず指導の際に指導者はこうした身体感覚とつながる言葉を発しており、その言葉は一般的に伝統スポーツのコミュニティ内で共有される表現でもあることから、このような表現も克明に記録し、身体の動きと連動させておく必要がある。

（4）身体と外なる世界

次に、身体を外から観察することに主眼を置いた身体技法研究の方法についても言及する。最初に「動きと美しさ」について注目したい。いわゆる美しさは、審美ということもあるが、コミュニティ内での価値観によって作り上げられていることが多い。そのため、何が美しいのか、またその美しさの獲得のために、どのようなトレーニングが行われているのか、といったことについても注意を向ける必要がある。

さらに、こうした美しさは、時代とともに変化することもある。一般的には、新しい技の開発や道具の改良、あるいは時代の移り変わりによって嗜好性が変化したことで身体技法そのものが変化することがある。こうした状況を明らかにするためには、身体技法を中心に据えた歴史研究が、まずは大きな意味を持つ。ただ、身体技法を歴史的に研究するにはやはり限界もあるので、ある程度深く掘り下げようとすると、現代史という制約付きの研究にならざるを得ない。

最後に、身体技法そのものに大きな影響力を与えることになっている組織についても言及しておこう。伝統スポーツが何らかの形で競技としておこなわれている場合、ルールが存在し、そのルールを司る組織が存在する。その組織の決定は、直接、身体技法の在り方そのものへ影響を与えることになる。伝統スポーツが一切変化をしないままに存続してきたわけではなく、その時代時代に応じた伝統認識に則した身体技法もまた存在してきたからである。そうした意味においては、身体技法においても「伝統の創造」が存在するわけである。

以上、述べてきたように、身体技法研究にはさまざまな視点と方法が存在しており、それらを総合して研究していくことがより豊かに身体技法を捉えることにもつながる。したがって、全ての研究視点について、同時並行的に研究していくことが、相互に補完的な関係を築き上げ、より広くより深い研究を進めることが可能となるのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 24 件）

① 石井隆憲、ミャンマーにおける伝統スポーツ「チンロン」の文化変化、学術フロンティア報告書 2009 年度、査読無、2010、日本語 pp.65-72、インドネシア語 73-810

② 金子元彦、全力運動での打動作に伴うパフォーマンス変動－バドミントンの場合－、ライフデザイン学研究、第 5 巻、査読有、2010、pp.51-62

③ 石井隆憲、伝統的な「型」の学習がもたらす感覚と認識－剣道を例として－、学術フロンティア報告書 2008 年度、査読無、2009、日本語 pp.33－41、クメール語 pp.105－112

〔学会発表〕（計 13 件）

① 石井隆憲、競技化による伝統的認識の持続－ミャンマー・チンロンの事例－、日本スポーツ人類学会、2010.3、名桜大学
② 石井隆憲、伝統スポーツの伝承と時間、国文学研究資料館（連携研究）「文化の往還」国際シンポジウム、2009.11、国文学研究資料館
③ 石井隆憲、ミャンマーにおける伝統スポーツ「チンロン」の文化変化、国際シンポジウム東洋大学アジア地域研究センター・ディポネゴロ大学アジア地域センター共同主催、2009.8、ディポネゴロ大学（インドネシア）
④ 石井隆憲、伝統的な「型」の学習がもたらす感覚と認識–剣道を例として–、国際シンポジウム「開発のための訓練・教育・文化的アイデンティティ–アジア諸国の比較研究–」、2008.9、カンボジア国立教育大学
⑤ 石井隆憲、フエ市における空手道の受容と変化、国際シンポジウム「承天フエ省における伝統文化の変容–人類学・歴史学および内・外の視点からの接近」、2008.9、ベトナム文化体育・旅行省文化芸術研究院フエ分院

〔図書〕（計 14 件）

① 石井隆憲監訳、石井隆憲、リーンナイン共訳、『ミャンマーにおけるチンロンの歴史』、東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター、2010、184 頁
② 石井隆憲、田里千代共編、『知るスポーツ事始め』、明和出版、2010、200 頁
③ 末成道男、阮有通編（新江利彦監訳）、石井隆憲、末成道男ほか 12 名、「フエ市における空手の受容と変化」、『トゥアティエン・フエ省における伝統文化の変容：人類学・歴史学よび内・外の視点からの接近』、東洋大学アジア文化研究所・アジア地域センター、2009、日本語 107－128 頁、ベトナム語 361－381 頁
④ 松尾順一、『近代ドイツにおける全国体操祭に関する史的研究（1860～1880）－ドイツ体操祭の国民統合的機能の分析を中心にして－』、日本体育大学（博士論文）、2008、452 頁
⑤ 比嘉佑典、後藤武秀、石井隆憲ほか 8 名、「ミャンマー伝統スポーツ『ラッウェ』の変容－民族のスポーツから国家のスポーツへ－」、『アジアの経済発展と伝統文化の変容』、東洋大学アジア文化研究所・アジア地域センター、2007、pp.130－152

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等　無し

６．研究組織

(1)研究代表者

石井　隆憲　（ISHII TAKANORI）
東洋大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：70184463

(2)研究分担者

松尾　順一　（MATSUO JUNICHI）
東洋大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：20122989
木内　明　（KIUCHI AKIRA）
東洋大学・ライフデザイン学部・准教授
研究者番号：70298181
金子　元彦　（KANEKO MOTOHIKO）
東洋大学・ライフデザイン学部・准教授
研究者番号：40408977
岩本　紗由美　（IWAMOTO SAYUMI）
東洋大学・ライフデザイン学部・准教授
研究者番号：30408976
鈴木　智子　（SUZUKI　TOMOKO）
東洋大学・ライフデザイン学部・講師
研究者番号：70440005